

## キャリアパス支援講演会 実施報告書

【演題】医薬品適正使用を目指した薬物動態研究の実践～これまでのキャリアを振り返って～

【講師】矢野 育子 氏（神戸大学医学部附属病院 薬剤部長）

【日時】令和3年2月2日（火） 14：40～16：10

【場所】Zoom 利用によるオンライン開催（岐阜薬科大学担当）

【参加者数】139名（うち女性研究者 8名）

所属機関：岐阜薬科大学137名、岐阜女子大学1名、アピ株式会社社1名



現在大学附属病院薬剤部長をしている講師は、薬学研究科を修了してから薬剤師になった。学生時代から機関は違えど大学病院の医療薬学分野一筋で、博士号の取得やアメリカへの留学（研究者の夫と子供の家族全員で）など、臨床研究者として長年活躍している。

本講演会では、自身のキャリアを振り返りながら、取り組んできた研究について、臨床研究者として薬剤師として大事にしていること、薬学部生に伝えたいことをお話しいただいた。

長年医療薬学分野で研究をしてきたことの紹介があった。「臨床の問題を基礎から解明して臨床にフィードバックする」心構えも示された。

研究が始まった学生に向けては、研究をするために「企画力、洞察力」が必要であり、それは「臨床力、人間力」の養成につながる。問題点を見つけて、調査、改善方法を考え、データを示すこと。薬剤師にも研究力が求められ、ひいては臨床力が身につく、と語られた。学生のみならずすべての研究者にも参考になる考え方である。

キャリアの話として、最初は独りで主宰する研究室に指導学生も一人配属であったが、徐々に増えていった。卒業までに英語論文一本を仕上げることを目標として指導されている。

また、チャンス到来と感じたらできるだけ受け入れることと話された。講師も、海外学会発表で話しかけられた日本人が厚生労働省の職員であり、帰国後にあらたな仕事が舞い込んできたという経験があり、共同研究により人脈が広がり自分の成長にもつながった。ほかにも、海外での学会発表で研究者とつながりができた経験から、学生には国内外問わず学会で発表をするよう勧められた。

また、仕事に追われないこと、チャンスをもたらったらありがたく受け取り、また独りよがりではなく周囲の助けを得ながらも自分の頭で考えることが大事だと話された。

今回の講演会では学部生が多く聴講しており、臨床薬剤師と研究者と両者を経験している講師の話は非常に有意義で、卒業後のキャリアパスを具体的にイメージできたのではないかと。若手の研究者や薬剤師にとっても、仕事に取り組む心構えなどを聞くことができ、有意義な機会となったと思われる。

